

## 環境を守る活動に終わりなし

ベテラン農家の方に交じって、高校生やキッズも参加していただきました。大歓迎です。  
西ノ池農道  
(2月2日)

今冬は例年のような風雪もなく、寒さも厳しくないのですが、好天が続きません。地域内の農道の除草清掃も西ノ池農道と金原農道の二つとなり、空模様をにらみながらなんとか実施できました。

農道の状態を考えて、男性は西側から東へ、女性は反対に進む方法で行いました。

羽週2月9日、金原農道の除草清掃を行いました。この農道は東西方向で最も長く450メートルあります。今回は参加者も25名と多く、刈り払い機も数台ありましたので、刈り払い機を、数10メートルおきに配置する方法で作業を行いました。

今年度の一斉に行う農道除草清掃作業は、今回で終わりです。今後は農業にに応じて、それぞれの担当者が実施

することになるでしょう。その折に、今回の清掃された状態が基本になるのではないのでしょうか。環境を守る活動は終わりがありません。



この農道の距離は約420メートルです。農家以外のご家庭の参加も頂き、26名の参加者となりました。こうした長い距離の作業では、参加人数が多ければ、一人ひとりの作業



日差しがまぶしいような天候に恵まれた金原農道での作業

### 今年の節分の幸運は

中郷八幡様の節分祭が、2月3日に予定通りに行なわれました。あいにく月曜日に当たりましたので、多くの方のご来場は望めないかもしれないと思いましたが、例年と変わらないご来場を頂きました。感謝申し上げます。



上位当選者の中に身近の方のお名前がいくつかありました。おおめでとうございます。

皆さまのお楽しみ、「節分くじ」も途中で景品が足りなくなり、急遽追加するという盛況でした。

節分祭に際しまして、たくさんの事業者や個人の方からご支援を頂きましたことに厚く感謝申し上げます。

地区宮総代 原田 茂樹

日本中の地域づくりのアイデア  
人づくり・地域づくりフォーラム

2月22・23日、山口県セミナーパークで「第15回人づくり・地域づくりフォーラム」が開催されました。北海道から沖縄まで24の団体が、それぞれの活動成果を発表しました。

全ての内容をお知らせすることはできませんが、日本の卓球界の立て直しの記念講演と、ごみゼロ運動の取り組みを紹介します。

世界から注目

ごみゼロ運動の小さな町

徳島県上勝町という「葉っぱビジネス」でご存知の方も多いと思います。料理のいりどりに様々な種類の植物の



記念講演 宮崎義仁氏が語る「若者育て」



2019年全農全日本卓球選手権ホープ(小学生)部門山口県チームの記念撮影(日本卓球協会 YouTube)

卓球の石川佳純選手の東京オリンピック出場が決まりましたが、若手の台頭で、石川選手の出場も危ぶまれるような状況でした。どうしてそんなに若い選手が出て来るのだろうかと思われたことはありませんか。

その答えが今回の記念講演にあります。1985年の世界選手権5位の実力者、宮崎義仁氏が全日本の監督になつて、一時はポロポロになつていた日本卓球を立て直したのです。

宮崎氏は若年層の強化から始めました。

ました。

葉を提供することで大きな収益を上げた町です。今や全国シェアの70%を誇るトップブランドとなりました。

しかし、その町の人口は1500人ほど、町の面積の86%は山地、しかも急峻な地形で棚田での耕作しかやりようがないという山間の小さな町です。

その小さな町が再び脚光を浴び始めたのは海外からの驚きの声でした。

2003年、上勝町では焼却又は埋め立てにすることを、2020年までにゼロにするという方針を決めました。「ZERO WASTE」ごみの減量

だけでなく、無駄をださない生活スタイルを目指すことになり

た。個人で小学生の全国大会を開催し、有望な小学生でナショナルチームを編成、強化したのです。

「人間力の向上が競技力の向上」であるという持論は、やがて多くの人に受け入れられ、若い選手がどんどん育つ環境が整ってきたのです。「挨拶」「自分の身の回りのこと」「学業」など当たり前のことを大切にしています。小学生の選抜試験には「国語」と「算数」の科目があります。「頭を働かさない」と試合で勝てない」宮崎氏の持論です。

トがたまり、リサイクル製品と交換できるようになっていきます。それでも関心を持たない人のために、カードの番号による抽選で毎月10人に1000円が当たる「おまけ」もついています。

今やリサイクル率は世界のトップレベル80%を超すこととなりました。日本の平均が20%といえますから、そのレベルが想像できますね。

小さな町だからできることじゃないかという質問がありました。「本来この活動は大都市から始まっているのです。私たちは小さな町で実施できる最善の方法を考えました。」担当者のお答えは明快でした。この最近では毎週のように海外のメディアが取材に来るという状況になっています。